

スクール フェスティバル

Vol.17

チャレンジ・ポジティブ・リラックス

大始良中学校

女子ソフトテニス部



▲普段の学校での練習の様子

大始良中学校女子ソフトテニス部は、3年生5人、2年生5人、1年生2人の計12人で活動しています。週5日程度の練習では、男女一緒に練習を行い、互いに切磋琢磨しています。練習中は意見がぶつかることもあります。普段は学年を超えて仲が良く、お互いを支え合えるチームです。

チームの合い言葉は、「チャレンジ・ポジティブ・リラックス」。どんな場面でも自分に負けず、前向きに挑戦することを大切にしています。これからも、先生方や保護者への感謝の気持ちを忘れず、チーム一丸となって頑張ります。



キャプテン
ふくおか はなり
福岡 花俐さん(3年生)

公民

地理

歴史

文化

文化財

まちづくり

人物

その他

かのや風土記の中身をさらに深掘り

鹿屋街道

第17路 つもつばい 土持堀の深井戸

シラス台地として有名な笠野原台地は、今でこそ畑地かんがい事業によって水で潤い、様々な作物が栽培されていますが、かつては、水が乏しく農業用水だけでなく、飲み水の確保にさえ苦しんでいました。

笠野原台地のシラスの層は数十mもの深さがあり、雨が降ってもすぐ地下に吸いこまれてしまう保水性のない土壌。そのため、水の確保が困難であり、長い間耕作ができませんでした。江戸時代には「堀」と呼ばれる土手を築き、領有を示すことで少しずつ台地が開発されていきました。堀の中では、底を粘土で固めた深さ約1mの池を掘り、雨水をためたり、大木に縄で杉の葉を縛り付け、幹を流れ落ちる雨水をカメにためたりして水を確保していました。水は時間が経つとボウフラが湧いてくるので、いざ水を使うときは、カメの縁をコツコツたたいてボウフラが驚いて底の方に沈んだ瞬間にひしゃくでくみ取る「タタキ水」を使用していたといわれています。その水を使わないといけないほど水は貴重であり、大切に

使用していました。

また、笠野原台地では生活用水確保のため、他地域では見られないほど深い井戸がいくつか掘られました。そのうちのひとつが「土持堀の深井戸」です。現存する井戸のうち最も原形をとどめているもので、井戸の深さ約64m、表面の直径は約90cm、円筒形の素掘りの井戸で、掘られたのは文政年間から天保年間ごろ(1818年～1841年)と考えられています。深井戸のため、大人5人程の労力で水を汲み上げる必要があったので、土持堀の深井戸では、牛に綱を引かせて水を汲み上げていたそうです。

この深井戸は、笠野原台地の開発の苦難の歴史を物語る貴重な文化財として、昭和57年に鹿児島県の指定史跡に登録されています。

●土持堀の深井戸

場所 串良町細山田5323



▲笠野原台地における水汲みの様子。牛に綱を引かせていた。